

私の「非日常」

松山 和雄

朝、東の窓の雨戸を開け
少しだけ顔を出した太陽に
向けて大きな伸びをします。
階下に降りると、人肌に暖
めたコップ一杯の白湯を飲
み、近くの公園まで山道を
歩きます。私の一日はこう
して始まります。

そんな日常から離れて、
「非日常」を体験したくて
旅に出ます。

この時期の定番はやはり
スキーです。スキーでは
様々なことが体験できます。
まず、スピードです。長
いコースを滑走するときは、
わずかに外気にさらされた
頬が風圧で痛くなります。

次に平衡感覚です。朝一
番の深雪では、日ごろ味わ
うことのできない地に足の
つかない、でもあまり恐怖
感の無い浮遊感が味わえま
す。

そして、景色です。緑と
鼠色、赤や黄など様々な色
彩の世界から白い世界へ、

心のキャンパスがリフレッ
シユされます。



活動日誌
一月六日 初歩き
十二月十一日 事務局会
十一月十一日 建國記念日
十一月十一日 反対集会
十一月十三日 陸旅行
十一月十三日 反貧困突
破生
県活民集
会

俳句

十二月十日 土曜
高知公園周辺にて

合田青幹
逝く年の思い出詰まる句集成る
シヤンデリア広間に年を惜しみ
けり

田所たねを
生きてゐて孫に貰ひしお年玉
日当ればそこに二輪の水仙花
吉本伸秋

ほうげ
放下終へ切りし安らぎ大冬木
せまれい
鶴鶴の尾に躍りゐる小春かな

中内英明
数へ日と言ひて何する詠もなく
鴨つみれ鍋に湯気立つ年流る

中内みち代
寅彦忌近しお庭の藪柑子
かしば
風に鳴る枯葉纏ひて樹の木

小笠原さちを

六十枚障子貼り替へ邸守る
裏庭の大樹の伐られ大冬日

一月十七日 土曜
雪隠寺 桂浜

合田青幹
南学の興りし寺へ寒詣
冬海へ突き出す龍馬記念館

吉本伸秋

心経や素心臘梅影もたず
冬の蝶目を深々と曇み込み

中内英明
門前に遍路宿あり寒の寺

土佐すでに春の海なり

さとし
青筋魚釣る

中内みち代

信親の宝篋印塔冬の梅

寒潮の礁を丸呑みしては吐き

小笠原さちを

金鈴子地を鏤めし祖廟かな
茉奈が行く佳奈が行く小春風

挿歌

哀惜 小松晋晟さん

榊原忠彦

整然たる理論家の君は藤村の
「初恋」を歌ふリリシストなり
し

校門に赤旗なびかせ校長室
占拠せし日よ君と並びて

(高知西高での私費職員待遇改善要求で)

不意の会ひ細木泌尿器科での待

合室懐かしげににじり寄り来し

年越し派遣村

山本晶子

年越しの日比谷公園派遣村、湯
浅誠の穏しき顔

(反貧困ネットワーク事務局長、派遣村村
長)

派遣村に二千万円超すカンパ届
けられしとうニュースを聞けり

「溜め込めし利益吐き出せ」新
聞もようよう企業の倫理を問え
り

〇九年初歩き

叶岡淑子

常連の減り行くさみしき踏みし
めて今年も集う新年「初歩き」

山の木を伐りてたちまち見事な
る杖つくり給うK氏に感謝

冬晴れの錦山公園めぐりたりト
サミズキ咲く春想いつつ

旅のたのしみ
野島幸代

私が旅行を楽しむようになったのは退職後三年ほど経った頃、文学を愛好する仲間と国内外へ出かけるようになった。今も年に二、三回はあちこちへ出かけている。文学小説に登場する人物は架空の人であつても、設定される場所は殆んど実在する都市や、土地名で出てくる。その地を訪れて文章の一節を思い出したり、作者の意図に思いを馳せて、時には自分を小説の主人公に置いてみたりしていい気分になつてゐる。

海外旅行の楽しさを知つたのは、「岡林先生(元高知大学教授)と行くヨーロッパ文学と歴史の旅」であつた。飛行機が怖くて海外旅行に行く勇氣のなかつた私が最初に訪れたのはドイツ、スイスの旅であつた。ベルリンの壁がとり壊されて間もない頃だつた。丘の上の古城、石畳の路地、統一された赤い屋根瓦の街並、教会の鐘の音、日本とは異なつた情景に魅せられてしまつた。森鷗外の「うたかたの記」の舞台となつたルドヴィッヒ二世終焉の地、ベルヒ城と彼が自殺をした湖に建つ小さな十字架が今も目に浮ぶ。築城狂と言われたルドヴィッヒが最後に手がけた白鳥城の美しさにも圧倒された。それ以来、スペイン、イギリス、

トルコ、ギリシャ、ノルウェー、スウェーデン、オランダ、イタリア、南フランス、他ヨーロッパ各地の文学と歴史を訪ねる旅を楽しんだ。ヨーロッパ各地には古い歴史があり、日本とは異なる風物、風俗、宗教、文化があるので、訪れる国のガイドブックへ一通り目を通してゆく。特に歴史的にどのような国であるかを頭に入れてゆくようにしている。帰ってきてから日本の歴史と比較して考察してみるのはおもしろい。

この頃の私の旅はカメラに主目的を置くようになっていく。四季、折々の風景、人々の暮しに主眼を置いてアングルを決めている。去年は印度北方、チベットの国境、シツキム州の元王国の山岳地へ行って来た。豊かな生活とは思えないが豊かな自然の中、チベット仏教を守りながら、農業を主にゆつたりとした生活をしていくように思ふ。一方、ちよつと立寄つたコルカタの都市では、IT産業の高層ビルが立ち並び高速道路が走っている。その片隅の高架下や、川沿に暮らす人、路上に横たわる病人らしき人、物乞いをする人などを目にして、その格差のひどさに悲しくなつた。十月には北フランスノルマンディー地方、ロワールとパリへ旅をした。地平線に太陽が沈む広大なフランス人の土地に驚き、憧れのモンサンミッシェルは小雨の中、浮ぶようにその美し

い姿を幻想的に見せてくれた。ゴッホ終焉の地オーベルでは、彼のアトリエや自殺をした部屋、弟と眠る質素な墓へも行った。古い城壁の残る街では市場や石畳の路地で生活風景を追っかけたりした。私が旅行して感動した事柄を語る述べることは他の人に共感を強要しているように思ふのでこのあたりで止めるが、元気なうちにあちこちへ挑戦しようと思つてゐる。

相撲ミニ知識 (八十七) 林 勤
相撲協会八十年を振り返る
十一、平成三年、七年
※この間は、横綱千代の富士引退から貴花田後の第六十五代横綱貴乃花の台頭、大横綱へと成長して行く時期である。
平成三年
○三月 外国力士同士の初の幕内対戦(新小結曙と大関小錦。押し出して曙の勝ち)。
○五月 第五十八代横綱千代の富士引退(陣幕親方後、九重襲名)
※千代の富士は通算勝ち星一〇四五、幕内勝星八〇七などの勝星史上二位、優勝三十一回・大鵬の三十二回に次ぐ史上二位などの記録を残した。
○五月 十二日(五月場所初日) 十八歳九月の貴花田が千代の富士を破る。史上最年少金星(平幕力士が横綱を破ること)となり、五月場所四日目の十五日に千代の富士は引退。
※これは千代の富士時代が終り貴

乃花時代の幕明けとなる「新旧交代」の一番となった。
○七月 第六十二代横綱大乃国引退。
平成四年
○一月 貴花田、十九歳五月、前頭二枚目で史上最年少初優勝。
第六十三代横綱旭富士(新大関日馬富士の師匠)引退。
○七月 同期のライバル三人の優勝決定戦(十三勝二敗の曙、貴ノ花、若ノ花、優勝決定戦で曙が優勝)。
※この三力士と魁皇の四人は共に昭和六十二年三月の初土俵。動機の四力士の中、魁皇一人が大関、他の三人が横綱となる。こんな例は他にない。
平成六年
○十二月 大関貴乃花二場所連続全勝優勝で第六十五代横綱になる(二場所連続全勝優勝では双葉山も第二十五代横綱になつてゐるが当時「昭和十二年」は一場所十一日と十三日であつた。十五日制になつてからは貴乃花が初)。
平成七年
○一月 本県出身第二十九代木村庄之助誕生(本名・櫻井春芳)。
木村庄之助は行司最高位の称号であり、力士なら東の正横綱である。庄之助は香南市旧香我美町岸本出身。昭和二十年十一月 初土俵。平成十二年三月場所引退。
○十一月 史上初の兄弟優勝決定戦。横綱貴乃花と大関若乃花、共に十二勝三敗で決定戦。若乃花の勝ち。
○十二月 財団法人日本相撲協会の七十周年記念式典。

い。再読すればなんとかなるだろうと思つてゐる。
最後に、標題の「わが家の金融」について述べよう。昨年の家計について総括する。預金通帳によれば、残高は想像以上に増えている。収入源は年金、利息、その他である。支出は公共料金など直接口座から四十二万円、引出後現金で支払われたのが百三十万円、計百七十二万円となつてゐる。相当節約してゐたと思われる。特に飲み代は……衣類の買い替えも殆どしていない。将来の被介護生活を見通した会計担当者が、緊縮財政の確立に向けて気を使つたと思われる。「ご苦労さんでした。今年もよろしく。」

わが家の金融
新年某日、原稿を仕上げるべくワープロに向かつたところ「あつと驚くタメゴロウ」書き進めていた文章がすべて消滅してしまつてゐた。加齢とともに脳が萎縮するそうであるが、操作を誤つたものである。思い出しながら再度綴ることになつた。ある日の散歩で久万川沿いの道を辿りながら考えた。このコースは坂道もなく、京都東山の「哲学の道」ではないが、いろんな想いがひとりだけで湧いてくる。勿論「哲学」ではなくて妄想である。その一端を披露しよう。その頃、目を通してゐた本は「ホーキングの最新宇宙論」と「金融化の災い」とする次第であつた。

人には理解できない。宇宙の根源を説明しようという分野の研究を論じたものであるからとにかく難解である。どこどころブラックホールなど耳にした言葉に出会つてほつ

次ぎに、大槻久志氏の「金融化」の本であるが、「サブプライムローン」問題で幕を切つた百年に一度と言われている経済危機、非正規労働者の大量首切り問題など看過できない事態が進行しているの、経済の勉強を考えた次第である。とにかく経済学については系統的な勉強をしたことがない。ただ一度、昔のことであるが、スターリンの「経済学教科書」なる文献の泊込み学習会に参加したことがあるのみで、あとはいわゆる「マル経」を嗜つた、いや舐めた程度である。「みんなのための経済の話」という副題につられて、この本を購読したわけだが、なかなか難し

山岳写真展のお知らせ
山岳写真展を開きます。作品は四国・日本アルプス・世界の山々です。主催 山原健二郎資料室
日時 〇九年4月17日~5月1日(金) 10時~16時
場所 高知城ホール 1階ロビー